

村田
保著

治罪法註釋

再版

卷四

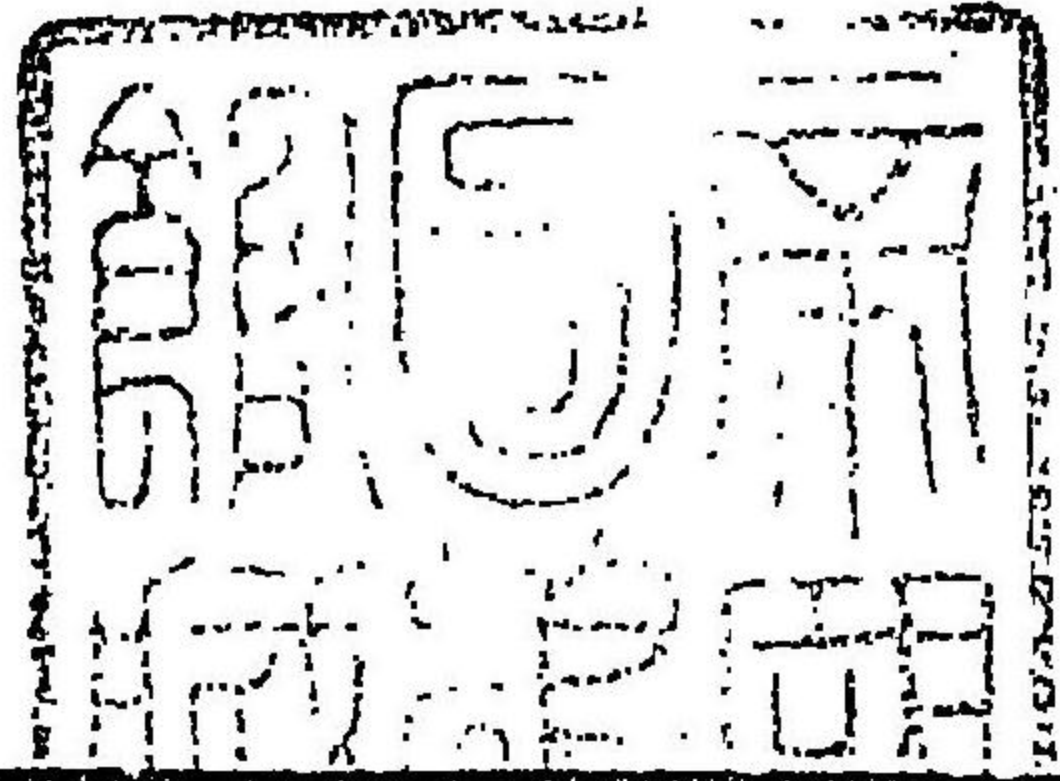
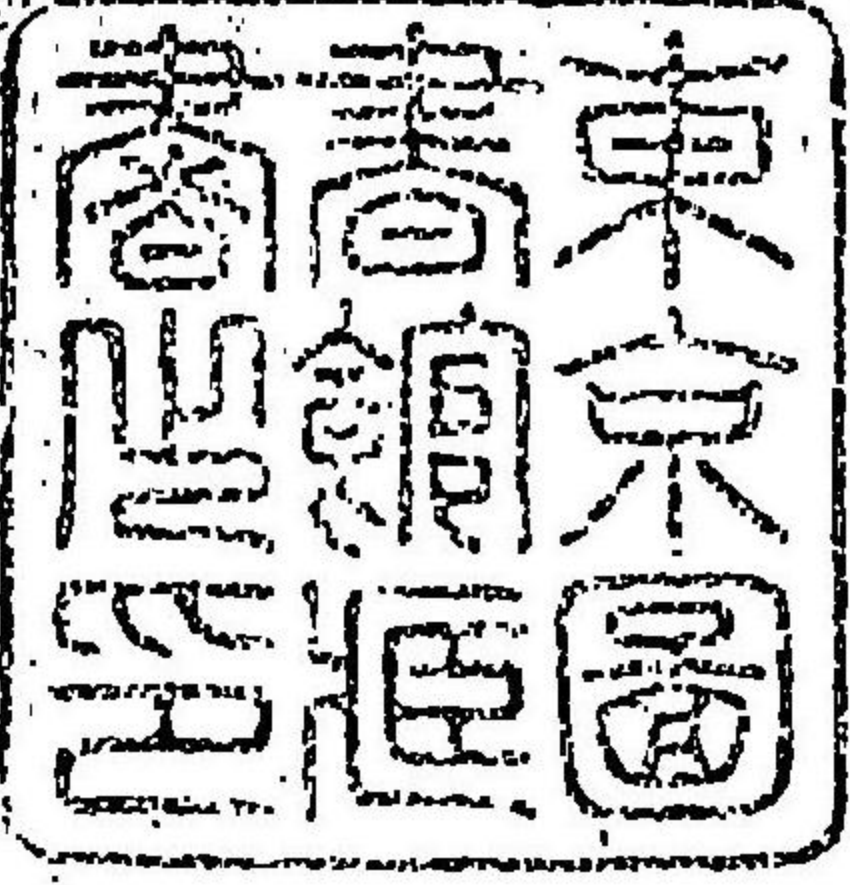
1
8

版卷之四目表

密至監禁	一葉
證據	四葉
被告人ノ訊問及對質	七葉
檢證及物件差押	十三葉
證人訊問	二十三葉
鑑定	三十九葉
現行犯ノ豫審	四十六葉

東京圖書館

函	四	門	新
架	三	部	十一
號		類	



治罪法註釋卷四

第二節 密室監禁

第四百十三條 豫審判事ハ豫審中事實發見ノ

爲_レ必要ナリト思料シタル時ハ檢事ノ請求ニ

因_リ又ハ職權ノ以テ勾留狀若クハ收監狀ヲ受

ケタル被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲ス

ヲ得

被告人ヲシテ共犯人及ヒ他ノ罪囚ト雜居セ

シノ若クハ其親屬故舊代言人等ニ接見セシ

ムル時ハ證據ヲ湮滅シ罪迹ヲ掩蔽スルノ恐

アリ故ニ法律ニ於テハ豫審判事事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ヲ密室ニ監禁スルノ言渡ヲ爲ストテ許セリ是レ其處置ノ頗ル過嚴ニ涉ルト雖モ事實發見ノ爲メ己ムトテ得サルノ法ナリ豫審判事ハ檢察官ノ請求ヲ待タス其職權ヲ以テ密室監禁ノ言渡ヲ爲ストテ得然レトモ豫メ檢事ニ通知シ其意見ヲ聽キタル上ニ非サレハ之ヲ行フトテ得ス

第四百十四條 密室監禁ノ言渡ヲ受ケタル被

告人ハ一名毎ニ之ヲ別室ニ置キ豫審判事ノ允許ヲ得ルニ非サレハ他人ト接見シ又ハ書類貨幣其他ノ物品ヲ授受スルトテ許サス食物飲料藥餌其他監倉ヨリ給ス可キ物品ト雖モ監倉長ノ特ニ指名シタル者ヲシテ之ヲ給與セシム

本條ハ密室監禁ノ效用ヲ定メタル者ナリ密室監禁ハ事實發見ノ爲メニ施ス非常ノ處分ナルヲ以テ一室ニ被告人一名ヲ閉居セシメ一切外人ト連接シ外人ト物品ヲ授受スル

ヲ嚴禁ス飲食其他日用ノ物品ニ至ルマテ給
與ノ方法ヲ嚴肅ニシ弊害ノ因テ生スル罅隙
ナカラシム豫審判事ニ於テ其接見授受スル
一ヲ許スモ弊ナキ一ヲ認メタル時ハ之ヲ允
許スル一ナシトヤス此場合ニ於テハ監獄ノ
規則ニ從フ可シ
第四百十五條 密室監禁ハ十日ヲ超過ス可カ
ラス但十日毎ニ其言渡ヲ更改スル一ヲ得
言渡ヲ更改スル時ハ其事由ヲ裁判所長ニ報告
ス可シ

豫審判事ハ十日間ニ少クトモ二度被告人ヲ訊
問シ通常ノ規則ニ從ヒ調書ヲ作ル可シ

密室監禁ハ已ム一ヲ得サルニ出ルノ處分ニ
シテ且人身自由ノ權ヲ停止スル者ナルヲ以
テ其時日ヲ制限セサル可カラス監禁ノ必要
ナラサル場合ニ於テ徒ニ之ヲ監禁スルハ不
法ノ甚クシキ者ナリ故ニ十日ヲ以テ原則ト
定メ其期限ヲ經過シ猶ホ監禁ヲ要スル時ハ
言渡ヲ更改シ且其事由ヲ裁判所長ニ報告ス
可シト定ム裁判所長ニ理由ヲ報告スル所以

ハ被告人ヲ保護スル確實ノ信憑ニシテ其處分ノ專横ニ渉ルヲ防キ且審理ノ延滞ニ流ル、ヲ救フニ在リ第六十二條第六十八條第八十二條參看

十日間ニ少クトモ二回訊問ヲ行フハ事ノ怠慢ニ渉ラサル爲メノ方法ナリ少クトモトアルヲ以テ事務ノ繁閑ニ從ヒ數回訊問ヲ行フハ固ヨリ法律ノ望ム所ナリ若シ豫審判事此規則ヲ履行セサルニ於テハ被告人ヨリ監禁ヲ解除セラレントヲ求メ時宜ニ因リ其判事

ニ對シ要償ノ訴ヲ爲スヲ得

○第三節 證據

第一百四十六條 法律ニ於テハ被告事件ノ模様

ニ因リ有罪ナルノ推測ヲ定ムルヲナシ

被告人ノ白狀官吏ノ檢證調書證據物件證人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ス

民事ト刑事トノ間ニ於テ證據ニ付キ大ナル差異アリ民事ニ付テハ法律上ノ推測ヲ以テ裁判官心證ヲ作ルノ具ト爲ス者亦尠カラス

刑事ニ付テハ或ル事件ニ對シ前ニ確定裁判
言渡アリタルニ因リ法律ノ推測ヲ用フル場
合ノ外事柄ノ模様ヲ以テ有罪ナルノ推測ヲ
定ムルヲナシ
第二項ニ記載シタル各種ノ證憑ハ直接ナル
犯罪ノ證憑ナリト雖モ必スシモ是ニ由テ罪
ヲ斷定ス可キ決意ヲ裁判官ニ措カシメス其
心證ヲ以テ判決ス可キ者ト定ム故ニ裁判官
罪ヲ斷スルニハ辯論對質シテ一切ノ證據徵
憑ヲ調査シ其感覺スル所ニ從ヒ判定ス可キ

者トス是レ裁判ノ要訣ナリ

第四百十七條 豫審判事ハ檢察官民事原告人
被告人ノ請求ニ因リ又ハ職權ヲ以テ事實發見
ノ爲メ必要ナリトスル證據徵憑ヲ集取ス可シ
豫審判事ハ第二百一條ノ如キ場合ヲ除クノ
外告ナケレハ審問ニ取掛ルヲ得スト雖モ
一旦訴ヲ受ケタル以上ハ證憑其他事實參考
ト爲ル可キ事物ニ至ルマテ細大トナク詳悉
之ヲ集取セサル可カラス
本條ニ所謂證據トハ犯罪ヲ證明スルニ付キ

其效力ノ確實ナル者ヲ云フ例ハ内亂ノ豫備陰謀ヲ爲スニ付テノ血判書ノ類徴憑トハ之ヲ證據ニ比スルニ其效力ノ薄弱ナル者ヲ云フ例ハ盜犯ノ足跡ノ類

第四百十八條 豫審判事臨檢家宅搜索物件差押又ハ被告人證人ノ訊問ヲ爲スニハ書記ノ立會ヲ必要トス書記ハ調書ヲ作り豫審判事ト共ニ署名捺印ス可シ

裁判所外ニ於テ急遽ノ際書記ノ立會ヲ得ルヲ能ハサル時ハ立會人二名アルヲ要ス但監倉ニ

就テ被告人ヲ訊問スル時ハ其監倉ノ官吏一名ヲシテ立會ハシム可シ

前項ノ場合ニ於テハ豫審判事自ラ調書ヲ作り之ヲ讀聞カセ立會人ト共ニ署名捺印ス可シ書記又ハ立會人ナクシテ爲シタル處分ハ其效ナカル可シ

豫審判事ハ自ラ處分ヲ爲シ自ラ記録ヲ掌トル可キ者ニ非ス故ニ書記ノ立會アルニ非サレハ其職務ヲ行フヲ能ハサルヲ以テ原則トス是レ其職務ヲ分割スルノ主義ノミナラス

又其處分ノ公正ニシテ規則ニ違背セサルノ
信憑ヲ固フスルノ主義ニ出ル者ナリ書記ノ
立會アリタルトハ調書ノ署名捺印ヲ以テ證
ス可シ
現行犯ノ檢證其他急遽ノ場合ニ於テハ書記
ノ立會ヲ待ツ能ハサルトアリ此場合ニ於テ
ハ立會人二名ヲ以テ書記ノ立會ニ代ラシム
監倉ニ就テ被告人ヲ訊問スル時ハ監倉ノ官
吏ヲ立會ハシムルヲ以テ別段立會人アルト
ヲ要セス

書記ノ立會ナキ場合ニ於テハ其立會ニ代ラ
シムル爲メ二名ノ立會人アレトモ之ヲシテ
調書ヲ作ラシム可カラズ故ニ豫審判事自ラ
書記ノ職務ヲ行フ
書記又ハ立會人ヲ要スル處分ニ付キ其立會
ナキ時ハ規則ニ背キタル者ナルヲ以テ其處
分ヲ無効トス

○第四節 被告人ノ訊問及ヒ對質

第四百十九條 豫審判事ハ先ツ被告人ヲ訊問
ス可シ但檢證ヲ爲シ又ハ證人ヲ訊問スルニ付

キ急速ヲ要スル時ハ此限ニ在ラス

被告人現ニ其場ニ在ル時ハ他ノ檢證處分ヲ
閣キ先ツ被告人ノ訊問ヲ行フ可シ何トナレ
ハ事實ノ如何ヲ知ルハ多クハ被告人ノ陳述
ニ在ルヲ以テナリ且場合ニ依リ被告人ノ訊
問ヲ猶豫スル時ハ其間ニ惡事ヲ隱蔽シ法官
ヲ眩惑スルノ弊ナキヲ免カレサレハナリ
然レトモ被告人ノ訊問ヲ閣キ先ツ檢證處分
ヲ爲シ又ハ證人ノ訊問ヲ爲サ、レハ事實ヲ
發見スルヲ能ハス又ハ證據湮滅ノ恐アル場

合ニ於テハ却テ被告人ノ訊問ヲ後ニス是レ
事實ヲ發見スルニ付キ缺ク可カラサル法ナ
リ

第一百五十條 豫審判事ハ被告人ヲシテ其罪ヲ
白狀セシムル爲メ恐嚇又ハ詐言ヲ用フ可カラ
ス

豫審判事ノ職務ハ證憑ヲ集取シ事實ヲ分明
ナラシムルニ在ルヲ以テ被告人ヲ説諭シテ
白狀ヲ爲シ共犯人ノ誰某タルヲ明言セシ
ムルハ法律ノ敢テ禁止スル所ニ非ス然レト

モ身體ニ對シ直接ノ拷訊ヲ加フルハ勿論恐
嚇シテ精神上ニ間接ノ拷訊ヲ施シ又ハ被告
人ヲ欺騙シテ共犯人誰某己ニ逮捕ニ就キ事
實ヲ白狀シタル等ノ一ヲ詐言シテ被告人ノ
白狀ヲ鉤發セントスル處置ノ如キハ法律ニ
於テ嚴禁スル所ナリ

第一百五十一條 書記ハ訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ
被告人ニ之ヲ讀聞カス可シ

豫審判事ハ被告人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ
問ヒ署名捺印セシム可シ若シ署名捺印スル

能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ハ本條ノ式ヲ履行シタル一ヲ記載シ豫審
判事ト共ニ署名捺印ス可シ

豫審判事ノ訊問被告人ノ答辯ハ甚タ重要ノ
者ナルヲ以テ必ス之ヲ錄取シテ保存セサル
可カラス是レ豫審ノ申立ト公判ノ陳述トヲ
比較ス可キ時又ハ豫審終結ノ言渡ニ對シ上
訴アリタル場合等ニ於テハ甚タ必要ナリト
ス

書記調書ヲ作りタル時ハ之ヲ被告人ニ讀聞

カセ其陳述ヲ固執スルヤ否又其陳述シタル所ト錄取シタル所ト相違ナキヤ否ヲ問ヒ甘結シタル上ニテ署名捺印セシム其署名捺印スルヲ能ハサル場合ニ於テハ其事由ヲ記載ス可シ假令被告人ノ署名捺印ナシト雖モ豫審判事及ヒ書記ノ署名捺印アル時ハ其調書ノ效力ヲ減殺スルヲナシ

第一百五十二條 被告人其陳述ニ付キ變更増減ス可キヲ申立タル時ハ更ニ訊問ヲ爲シ前條ノ規則ニ從ヒ其訊問及ヒ陳述ヲ錄取シ之ヲ讀

聞カセ署名捺印ス可シ

被告人前ニ爲シタル陳述ヲ變更増減セントスルモ之ヲ抑制ス可カラズ此場合ニ於テハ更ニ訊問ヲ爲シ總テ前條ノ規則ニ從ヒ之ヲ結了ス可シ

第一百五十三條 被告人ハ陳述書ノ謄本ヲ求ムルヲ得

被告人ハ前後ノ陳述ノ齟齬スルヲ防ク爲メ陳述書ノ謄本ヲ請求スルヲ得本來被告人辯護ノ權ハ之ヲ妨礙ス可カラサル者ナルヲ

以テ其請求アリタル時ハ必ス之ヲ下付セサル可カラス

第一百五十四條 豫審判事ハ被告人ノ共犯ナル一人違ナキト其他事實ヲ發見ス可キ一切ノ模様ヲ證スル爲メ必要ナリトスル時ハ被告人ト他ノ被告人證人又ハ其他ノ者ト對質セシムルヲ得

豫審ハ秘密ノ取調ヲ以テ主義トス故ニ豫審ニ於テ對質ヲ爲スハ頗ル其主義ニ背馳スル者ノ如シ然レトモ被告人ト他ノ共ニ訴ハラ

レタル被告人ト又被告人ト證人若クハ其他ノ者ト對質セシムル時ハ被告人遂ニ事實ヲ隱蔽スルヲ能ハスシテ眞實ヲ吐露スルヲアラシ抑々豫審ノ對質ハ密審ノ主義ニ背馳スルニ似タリト雖モ其事實ヲ發見スルニ付テハ却テ密審ヲ爲スノ原旨ニ適フ者ナリ

第一百五十五條 書記ハ對質人ノ陳述及ヒ對質ニ因リ生スル一切ノ事件ヲ錄取シ對質人ニ其對質ニ關スル部分ヲ讀聞カス可シ

第一百五十一條 第一百五十二條ノ規則ハ對質ニ付

テモ亦之ヲ適用ス

對質ニ關スル一切ノ問答ハ第百五十一條ノ規則ニ從ヒ書記之ヲ錄取整頓ス可シ對質人ニハ各其關係アル部分ノミヲ讀聞カセ其關係ナキ部分ニ及ハス蓋シ豫審處分ハ其關係外ノ人ニ付テハ秘密ヲ要スレハナリ
調書ヲ整頓スルニ付キ第百五十一條第百五十二條ヲ適用スルハ其重複ヲ避クルカ爲メナリ

第百五十六條 被告人又ハ對質人聾ナル時ハ

書面ヲ以テ問ヒ啞ナル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム若シ聾者啞者文字ヲ知ラサル時ハ通事ヲ命ス可シ

被告人又ハ對質人國語ニ通セサル時亦同シ
被告人又ハ對質人聾者ナルモ文字ヲ解スル時ハ書面ヲ以テ訊問シ又啞者ナルモ文字ヲ書スルヲ得ル時ハ書面ヲ以テ答ヘシム文字ヲ知ラサル時ハ書面ヲ以テ問答スルニ由ナキヲ以テ記號手樣等ヲ用ヒ意ヲ通スル所ノ通事ヲ命セサル可カラス

被告人對質人方言ヲ解スルノミニシテ普通ノ國語ヲ解セサル者ナシトセス又對質人外國人ナルコトアリ然ル時ハ問答ノ意ヲ通スル爲メ彼我ノ言語ヲ解スル通事ヲ用テ可シ

第百五十七條 通事ハ正實ニ通譯ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ

書記ハ通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム可シ

第百九十二條第百九十三條第二百條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

通事ハ其事ニ取掛ル前正實ニ通譯ス可キ旨ヲ誓ヒ其信憑ヲ表セサル可カラズ其宣誓ヲ爲スニ付テノ法式ハ鑑定人ノ宣誓ニ付キ第百九十三條ニ定ムル所ニ同シ

書記通事ニ調書ヲ讀聞カセ之ヲ整頓スルノ法式ハ第百五十一條ニ記スル所ト異ナルコトナシ

○第五節 檢證及ヒ物件差押

第百五十八條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪ノ犯所ニ臨ミ檢證

ヲ爲ス可シ

又檢事ノ請求アリタル時ハ如何ナル場合ト雖モ臨檢ス可シ

犯罪ノ痕迹多クハ犯所ニ現存スル者ナリ故ニ犯所ニ就テ檢證處分ヲ爲スハ事實ヲ發見スルニ付キ甚タ必要トス豫審判事臨檢ヲ爲スニハ檢事ノ請求ニ因リ又ハ請求ナシト雖モ自己ノ職權ヲ以テ之ヲ爲スヲ得一般ノ場合ニ於テ豫審判事ハ不羈獨立ノ者ナルヲ以テ檢事ノ請求ニ從ハサル可カラサルノ義

務ナシ然レトモ臨檢ス可キ事ニ付キ檢事ノ請求アリタル時ハ必ス之ニ應セサル可カラズ是レ例外ニ屬スル者ナリ

第百五十九條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法日時場所及ヒ被告人ノ人違ナキヲ證明ス可キ模様ニ付キ調書ヲ作ル可シ

又被告人ノ利益ト爲ル可キ模様ヲモ記載ス可シ

本條ニ於テハ檢證ス可キ事件ノ大要ヲ舉示シタル者ナリ抑々犯狀ハ百出ナルヲ以テ法

律ニ於テ豫メ劃定ス可キ者ニ非ス其詳細ヲ
網羅シテ遺サ、ルハ全ク豫審判事ノ注意ニ
在リ

豫審判事ハ被告人ノ害ト爲ル可キヲノミテ
證明シテ調書ニ記載ス可キ者ニ非ス被告人
ノ利益ト爲ル可キ模様モ亦調書ニ記載ス可
シ是レ正理公直ニ基ク者ニシテ其職務ノ性
質ニ適スル者ナリ

第一百六十條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ發
見シタル物件其出所及ヒ模様ニ因リ被告人ノ

人違ナキヲ又ハ犯罪ノ模様ヲ知ルニ足ル可シ
ト思料シタル時ハ之ヲ差押ヘテ認印ヲ爲シ目
録ヲ作ル可シ但其物件ヲ監護シ又ハ遞送スル
ハ書記之ヲ擔任ス可シ

臨檢ノ場所ニ於テ犯罪事件ノ證據又ハ徵憑
ト爲ル可キ物件即チ兇器衣片其他犯人ト思
料ス可キ者ノ氏名ヲ記シタル物品等ヲ發見
シ審判上有用ノ者ナリト認ムル時ハ其散佚
ヲ防ク爲メ差押ヘテ封印ヲ爲シ目錄ニ其品
目及ヒ箇數ヲ明記ス可シ是等ノ物品ハ犯罪

ヲ證明スルニ付キ効力アル者ナルヲ以テ其
保存ヲ鄭重ニセサル可カラス故ニ監護遞送
ノ處分ハ書記ノ擔任スル所トス

第六十一條 豫審判事ハ臨檢家宅搜索物件
差押ニ付キ其日ニ處分ヲ終ラサル時ハ場所ノ
周圍ヲ閉鎖シ又ハ看守者ヲ置クヲ得

檢證處分頗ル繁密ニ涉リ一日ニ其處分ヲ結
了スルヲ能ハサルヲアリ此場合ニ於テハ罪
迹ノ湮滅ヲ防ク爲メ其場所ノ外圍ニ柵欄ヲ
爲シ又ハ看守者ヲ置キ其取締ヲ爲サシムル

ヲ得

第六十二條 豫審判事ハ被告人ノ住所又ハ
事實ヲ證明ス可キ物件ヲ藏匿スルノ疑アル者
ノ住所ニ臨檢スルヲ得

被告人又ハ物件ヲ藏匿スル者其住所ニ在ラサ
ル時ハ同居ノ親屬若シ其在ラサル時ハ戸長ノ
立會アルヲ要ス

第三十三條第三項ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ
適用ス

人民ノ家宅ハ侵ス可カラサルノ巢窟ナリト

雖モ犯罪事件ヲ證明スル爲メ不良ノ家ヲ搜索スルハ已ムコトヲ得サルノ處置ニシテ又至當ノコナリ戸主ノ在ラサル場合ニ於テ搜索ヲ爲スコトヲ許サレハ實際甚ク差支アラシ何トナレハ戸主ハ豫メ搜索アルコトヲ探知シ故サラニ隱避スレハナリ故ニ戸主不在ナリト雖モ同居ノ親屬又ハ戸長ノ立會アル時ハ其處分ヲ行フニ於テ敢テ妨ケナシトス抑々家宅搜索ハ非常ノ處分ナルヲ以テ濫リニ之ヲ行フ可カラス假令必要ナリトスル場合ト

雖モ立會人ナキ時ハ決シテ之ヲ行フ可カラ

ス
夜間ハ人民安息ノ時間ナリ故ニ其安息ヲ妨ケンコトヲ恐レ日出前日没後ニハ假令急遽ヲ要スルコトアリト雖モ家宅搜索ノ處分ヲ行フコトヲ禁ス是レ茲ニ第三百三十三條ノ三項ヲ適用スル所以ナリ

第三百三十三條 被告人ハ臨檢家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ立會ハシムルコトヲ得若シ被告人勾留ヲ受ケタル時ハ自ラ立會フコト

ヲ得ス但豫審判事本人ノ立會ヲ必要ナリトス
ル時ハ此限ニ在ラス
民事原告人及ヒ其代人ハ前ニ記載シタル處分
ニ立會フヲ得但豫審判事ハ其立會ノ爲メ豫
審ヲ遲延ス可カラス

被告人ハ頗ル利害ノ關係アルヲ以テ自ラ檢
證家宅搜索ノ處分ニ立會ヒ又ハ代人ヲシテ
立會ハシムルヲ得豫審判事ハ決シテ其立
會ヲ拒絕ス可カラス

勾留ヲ受ケタル被告人ニ付テハ逃亡ノ恐ア

ルヲ以テ自ラ立會フヲ許サス然レトモ本
人ノ立會アルニ非サレハ事情詳悉シ難キ
アルヲ以テ豫審判事ヨリ特ニ命シテ立會ヲ
爲サシムルヲアリ

被告人ノ檢證處分ニ立會フヲ許ス時ハ民
事原告人ニモ亦其權ヲ與ヘサル可カラス蓋
シ原被ノ權利ハ法律上平等無偏ナルヲ欲ス
レハナリ豫審判事ハ臨檢家宅搜索ヲ爲スニ
付キ豫メ其旨ヲ被告人民事原告人ニ通知ス
ルニ及ハス又是等ノ者立會ヲ請求シタル場

合ト雖モ必シモ其至ルヲ待テ處分ニ取掛ル
ヲ要セス蓋シ本條ノ處分ハ毫モ機ヲ誤ル
可カラサルヲ以テナリ

第百六十四條 家宅搜索ノ場合ニ於テ豫審判
事ハ第百六十條ノ規則ニ從ヒ物件ヲ差押ヲ可
シ

物件ヲ差押ヘタル時ハ其目錄ノ謄本ヲ立會人
ニ渡ス可シ

豫審判事ハ家宅ヲ搜索シテ其果效ヲ得即チ
犯罪ヲ證明スルニ足ル可シト思料スル所ノ

物件ヲ發見シタル時ハ第百六十條ノ規則ニ
從ヒ之ヲ差押ヲ可シ其物品目錄ノ謄本ヲ立
會人ニ渡スハ所有權ヲ重ニスルノ趣意ニ出
タル者ナリ若シ其目錄ノ謄本ヲ下付セサル
時ハ立會人ヨリ之ヲ求ムルノ權アリ

第百六十五條 豫審判事ハ被告人物件差押ノ
處分ニ立會ヒタルト否トヲ問ハス其物件ヲ被
告人ニ示シ辯解ヲ爲サシム可シ

其訊問及ヒ陳述ハ之ヲ調書ニ記載ス可シ
事實ヲ證明スルニ必要ナリトシテ差押ハ夕

ル物件ヲ被告人ニ示シテ尋問スル時ハ被告人遂ニ惡事ヲ隱蔽スルヲ能ハスシテ眞實ヲ吐露スルヲアラン是レ直接ニ其物件ニ對シ神情ノ感動スル者アレハナリ其訊問及ヒ陳述ハ事件ノ虛實ヲ驗審スルニ付キ最モ重要ノ者ナルヲ以テ細大ヲ論セス之ヲ調書ニ記載セサル可カラス

第百六十六條 豫審判事ハ臨檢ノ場所ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要ナリトスル時ハ書記ノ立會ニ依リ各別ニ之ヲ訊問ス可シ

第百七十條以下ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス

家宅搜索犯所臨檢ノ場合ニ於テ證人ノ陳述ヲ聽カサレハ事件ノ虛實ヲ知ルヲ能ハサルヲアリ此場合ニ於テハ其場ニテ同行シタル書記ノ立會ニ依リ第百四十八條參看各人各別ニ訊問ス是レ其陳述ノ雷同ヲ防クカ爲メナリ證人ヲ訊問スルニ付キ他ニ履行ス可キ法式勘シトセス是レ第百七十條以下即チ證人訊問ノ規則ヲ茲ニ適用スル所以ナリ

第百六十七條 豫審判事ハ前數條ニ記載シタル處分中何人ニ限ラス允許ヲ得スシテ其場所ニ出入スルヲ禁スルヲ得
若シ其禁ヲ犯ス者アル時ハ之ヲ逐斥シ又ハ處分ヲ終ルマテ之ヲ留置スルヲ得
檢證臨檢ノ場所ニ衆人濫リニ出入スル時ハ或ハ證憑ヲ湮滅シ或ハ取調ニ關シ必要ナル者ト他ノ無用ノ者ト混亂シ其處分ノ妨礙ヲ爲スニ尠カラス故ニ其處分ニ關係アル者ノ外ハ身分ノ如何ヲ問ハス豫審判事ノ允許ナ

クシテ一切濫入濫出スルヲ許サス若シ其禁ヲ犯シテ入ル者ハ之ヲ逐斥シ出ル者ハ其處分ノ結了スルマテ之ヲ留置スルヲ得其留置ハ一時權宜ノ處分ナルヲ以テ決シテ之ヲ刑ト混同ス可カラズ
第百六十八條 豫審判事ハ其管轄地内ト雖モ時宜ニ因リ臨檢家宅搜索ノ事ヲ其地ノ治安判事ニ囑託スルヲ得
豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必要ナリトスル場合ニ於テ其管轄地内ナレハ路程ノ遠近ヲ

明治十四年九月第四十六號布告
治罪法第百六十八條ニ於テ治安判事ニ囑託スルヲ許シタル處分ハ當分ノ内其地ノ司法警察官ニ囑託スルヲ得

問ハス檢證又ハ家宅搜索ノ爲メ自ラ其地ニ
 臨ム可キヲ正則トス然レトモ必ス自ラ其地
 ニ臨マサルヲ得ストスル時ハ實際ノ不便
 亦甚シ故ニ法律ニ於テ便宜ノ爲メ其事ノ輕
 重難易其時ノ模様ニ從ヒ臨檢ス可キ場所ニ
 接近シタル治安裁判所判事ニ臨檢家宅搜索
 ノ處分ヲ囑託スルヲ許セリ
 第百六十九條 豫審判事ハ事實發見ノ爲メ必
 要ナリトスル時ハ驛遞電信鐵道ノ官署諸會社
 ニ其事由ヲ通知シ被告人又ハ豫審ニ關係アル

者ヨリ發シ若クハ是等ノ者ニ對シ發シタル書
 類電報又ハ物件ヲ受取開披スルヲ得但受取
 證書ヲ渡ス可シ
 前項ノ書類物件不用ニ屬シタル時ハ其官署又
 ハ會社ニ還付ス可シ
 人身自由家宅不侵ノ原則ト同ク書翰ノ秘密
 ハ侵ス可カラサル者トス然レトモ治罪ノ爲
 メ已ムヲ得サル處分ニ付テハ必スシモ此
 原則ニ因リ難キヲアリ是レ本條ノ設ケアル
 所以ナリ被告人ヨリ他人ニ對シテ發シ又ハ

他人ヨリ被告人ニ對シテ發シタル書類電報
物品ノミナラス豫審ニ關係アル者ヨリ他人
ニ對シテ發シ又は等ノ者ニ對シテ他ノ者ヨ
リ發シタル書類電報物品ト雖モ豫審判事ニ
於テ事實發見ノ為メ必要ナリトスル時ハ驛
遞電信鐵道ノ諸局又ハ海陸運漕ノ諸會社ニ
其事由ヲ通知シテ之ヲ受取開披スルヲ得是
等ノ官署又ハ會社ニ通知セスシテ濫リニ受
取開披スルハ專横ノ處分タルヲ免レス受取
證書ヲ渡ス者ハ其事ヲ確實ニシ且官署又ハ

會社ノ責任ヲ免レシムル為メナリ
豫審終結ニ至ルカ又ハ公判落著アリタルニ
依リ前ニ受取リタル所ノ書類物件不用ニ屬
シタル時ハ官署又ハ會社ニ之ヲ還付ス可キ
者トス

○第六節 證人訊問

第百七十條 豫審判事ハ檢事民事原告人又ハ
被告人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出ス
可シ

原告證人被告證人ノ員數夥多ナル時ハ指名ノ

順序ニ從ヒ又ハ最モ事實ヲ知ル可シト思料シタル者輕罪事件ニ付テハ各五名重罪事件ニ付テハ各十名ヲ限リ先ツ之ヲ呼出ス可シ但事實發見ノ爲メ必要ナリトスル時ハ此限ニ在ラス又原被ノ指名セサル者ト雖モ豫審判事ノ職權ヲ以テ證人トシテ之ヲ呼出ス可キ得證人ノ陳述ハ裁判官ノ由テ以テ心證ヲ資リ又事實ヲ推測スルノ材料ト爲ル可キ者トス抑々證人ト爲ル可キ得可キ者ハ特ニ犯罪ヲ目撃シタル者ニ限ラス犯罪前後ノ模様及ヒ

被告人ノ素行ヲ熟知スル者ヲ證人トシテ訊問スル時ハ事實ヲ發見スルニ於テ大ニ裨益アラシク是ヲ以テ豫審判事ハ檢事其他訴訟關係人ヨリ證人トシテ指名シタル者ヲ呼出シ之ヲ訊問ス可シ其原被ノ指名セサル者ト雖モ職權ヲ以テ之ヲ呼出ス可キ得

原被ノ指名シタル證人夥多ニシテ悉ク之ヲ呼出ス時ハ翻テ冗費ヲ増シ且審理ノ遷延ヲ致ス可シト思料スル場合ニ於テハ輕罪事件ナレハ原告證人五名被告證人五名又重罪事

件ナレハ各十名ヲ限リ之ヲ呼出シ其訊問ヲ
終リタル後餘ノ證人ヲ呼出スヲ得

第一百七十一條 證人ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之
ヲ呼出ス可シ但其呼出狀ハ第二十三條ノ規則
ニ從ヒ之ヲ送達ス可シ

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ輕
罪裁判所書記ニ送達ノ事ヲ囑託ス可シ

證人ノ呼出ハ豫審判事ノ名ヲ以テ之ヲ爲シ
書記其所屬ノ使丁ヲシテ呼出狀ヲ送達ヤシ
ハ其送達ノ式ハ訴訟關係人ニ於ケル者ト異

ナルヲナシ若シ證人其裁判所ノ管轄地外ニ
在ル時ハ其所在ノ地ニ使丁ヲ發遣スルヲ能
ハサルヲ以テ其地ノ書記ニ囑託シテ送達ヲ
爲サシム可シ

第一百七十二條 豫審判事ハ證人裁判所所在ノ
地ニ住セサル時ハ其住所ノ地ノ治安判事ニ訊
問ノ事ヲ囑託スルヲ得

若シ證人管轄地外ニ在ル時ハ其所在ノ地ノ豫
審判事又ハ治安判事ニ訊問ノ事ヲ囑託スルヲ
得

明治十四年九月第四
十六號布告

治罪法第七十二
條ニ於テ治安判事
ニ囑託スルヲ得
シタル處分ハ當分
ノ内其地ノ司法警
察官ニモ囑託スル
ヲ得

本條ノ場合ニ於テ呼出狀ハ囑託ヲ受ケタル判
事ノ名ヲ以テ其裁判所ノ書記局ヨリ之ヲ送達
ス可シ

證人管轄地内ニ住スルモ其住居裁判所所在
ノ一市内ニ在ラサル時ハ遠ク之ヲ呼出ス
ヲ必要トセス事件輕微ニシテ繁難ナラサル
ニ於テハ其住所ノ地ノ治安判事ニ囑託シテ
訊問ヲ為シ調書ヲ送致セシムルヲ得可シ證
人管轄地外ニ在ル時モ亦同シ

第七十三條 呼出狀ニハ證人ノ氏名住所及

ヒ職業ヲ記載ス可シ

又出頭ノ日時場所及ヒ呼出ニ應セサル時ハ罰
金ヲ言渡シ且勾引スルヲアル可キ旨ヲ記載ス
可シ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時
ノ猶豫アル可シ

呼出狀ニハ證人ノ氏名住所等ヲ記載ス可シ
其呼出ニ應セサル時罰金ヲ言渡ス可キ等ノ
事ヲ記載スルハ其出廷ヲ脅迫スルニ非ス其
法律ヲ知ラサルカ爲メ自ラ刑罰ニ陷ル、

ナカラシメンカ爲メナリ

呼出狀ノ送達ト出廷トノ間二十四時以上ノ猶豫ヲ置キ且路程ノ距離ニ應シ尚ホ相當ノ猶豫ヲ加フ是レ其證人ヲシテ出頭ノ豫備ヲ爲スノ暇アラシムルカ爲メナリ

第百七十四條 證人疾病公務其他正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサルヲ證明シタル時ハ豫審判事其所在ニ就テ之ヲ訊問ス可シ
呼出ヲ受ケタル證人醫師ノ診斷書所屬長官ノ證票等ヲ以テ其疾病公務若クハ父母ノ重

病其他正當ノ事故アリテ出廷スルヲ能ハサル旨ヲ證明シタル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ訊問ス可シ

若シ事件重大ナラス其證人ノ陳述モ亦必要ナラスト認ムル時ハ臨訊ヲ爲スニ及ハス

第百七十五條 證人ト爲ル可キ者陸海軍在營ノ軍人軍屬ナル時ハ其所屬長官ヲ經由シテ呼出狀ヲ送達ス其長官ハ即時ニ出廷セシム可キトヲ認可シ又ハ職務上已ムヲ得サル差支アル時ハ其事由ヲ付シテ出廷ノ延期ヲ豫審判事

ニ請求ス可シ

本條ノ規則ハ第三百三十六條ニ定ムル所ト其趣旨ヲ同フス若シ證人ノ所屬長官ニ於テ出廷ノ延期ヲ請求シタル時ハ判事相當ノ猶豫ヲ與ヘ若クハ前條ノ規則ニ從ヒ軍營ニ臨テ訊問ヲ爲ス可シ

第三百七十六條 豫審判事ハ前二條ニ定メタル差支ノ場合ヲ除ク外證人呼出ニ應セサル時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ二圓以上十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控

訴ヲ許サス

豫審判事ハ其證人ニ對シ罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ヲ送達シ又ハ直チニ勾引狀ヲ發スルヲ得但其費用ハ證人ヲシテ之ヲ擔當セシム

若シ證人再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金ヲ言渡シ且勾引狀ヲ發スルヲアル可シ證人トシテ呼出ヲ受ケタル者正當ノ事故ナクシテ出廷セサル時ハ本條ノ規則ニ從ヒ相當ノ處分ヲ爲ス可シ其再度ノ呼出ヲ爲シ又

ハ勾引狀ヲ發シタル場合ニ於テ費用ヲ擔當
セシムル者ハ其怠慢ノ爲メ此費用ヲ要スル
ニ至リタレハナリ再度ノ呼出ヲ爲スモ仍ホ
出廷セサル時ハ罰金ヲ二倍シ四圓以上二十
圓以下ト爲ス最初罰金ノ多數十圓ヲ言渡シ
タリトモ再度ニ至リ其寡數四圓ヲ言渡スモ
妨ケナシ抑々證人ト爲リ陳述ヲ爲スハ國民
公權ノ一ナリト雖モ亦是レ一箇ノ義務ナリ
トス故ニ其義務ヲ行ハサル者法律ニ於テ之
ヲ罰ス畢竟其陳述ニ因テ事實ヲ明白ニシ以

テ犯人ノ法網ヲ免ル、ヲ防キ無辜ノ冤罪ニ
陷ラントヲ避ケンカ爲メナリ

第百七十七條 豫審判事ハ證人初度又ハ再度
ノ呼出狀ヲ受ゲサルト其呼出狀第百七十三條
ノ規則ニ背キタルト又ハ豫知シ難キ正當ノ事
故アリテ出廷スル能ハサリシトテ證明シタル
時ハ檢事ノ意見ヲ聽キ其罰金ノ言渡ヲ取消ス
可シ

證人呼出狀ノ送達ヲ受ケス又ハ呼出狀中其
氏名住所若クハ出頭不可キ日時場所等ヲ記

載セス或ハ非常ノ變災ニ遇ヒ豫メ出廷シ難キ旨ヲ届出ルヲ能ハサル時ハ固ヨリ其過失ニ非サルヲ以テ罰金ノ言渡ヲ取消スハ至當ノ事ナリトス

第百七十八條 證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ書記ニ差出ス可シ若シ之ヲ遺失シタル時ハ其人違ナキヲ證明ス可シ

第百七十九條 豫審判事ハ證人トシテ呼出シタル者ニ對シ其氏名年齢職業住所及ヒ第百八十一條ニ記載シタル者ナリヤ否ヲ問フ可シ

第百八十條 豫審判事ハ證人ヲシテ愛憎畏懼ノ心ナク正實ニ陳述ヲ爲ス可キヲ宣誓セシム可シ

豫審判事ハ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ之ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

宣誓書ハ訴訟書類ニ添置ク可シ

證人出廷シタル時ハ先ツ其人違ナキヲ證スル爲メ氏名年齢等ヲ問ヒ然ル後第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ナルヲ

知リタル時ハ之ヲシテ宣誓セシムルヲナク
 止テ事實參考ノ為メ其陳述ヲ聽ク可シ蓋シ
 宣誓ハ證人其面目ト本心トニ誓ヒ以テ其陳
 述ノ正實ニシテ誣罔ニ出テサルヲ保スル
 者ナレハ判事心證ヲ資ルニ於テ大ニ效力ア
 リ故ニ法律上證人ト爲ルヲ得可キ者ハ其
 陳述ヲ聽クニ先タチ必ス宣誓ヲ爲サシム其
 式ハ判事宣誓書ヲ讀聞カセタル上ニテ證人
 ヲシテ宣誓スル旨ヲ述ヘ署名捺印セシムル
 ニ在リ

第百八十一條 左ニ記載シタル者ハ證人ト爲
 ルヲ得
 一 民事原告人
 二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬
 三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ
 者ノ後見ヲ受クル者
 四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

自ラ訴ヘテ自ラ證ス以テ證ト爲ス可カラス
 父罪ヲ犯シテ子之ヲ證ス人情ノ忍ヒサル所

ナリ苟クモ被告事件ニ付キ利害情義ノ關係
アル者ハ其言信實ナラサルノ疑アリ故ニ本
條ニ記載シタル者ハ宣誓ヲ爲サシムルナ
ク止夕事實參考ノ爲メニ其陳述ヲ聽ク可キ
ノミ

第百八十二條 左ニ記載シタル者亦前條ニ同
シ

一十六歳未滿ノ幼者

二知覺精神ノ不充分ナル者

三瘖啞者

四公權ヲ剥奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタ
ル者

五重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ
受ケ又ハ重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付
キ公判ニ付セラレタル者

六現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受
ケ其證憑充分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受
ケタル者

本條第一第二第三ニ記載シタル者ハ知識淺
薄其言信シ難シ第四ニ記載シタル者ハ罪ヲ

犯シテ刑法第三十一條以下ニ從ヒ公權ヲ剥奪セラレ又ハ之ヲ行フヲ停止セラレ因テ證人ト爲ルノ權ヲ有セス第五ニ記載シタル者ハ重大ナル事件ニ付キ被告人ト爲リ既ニ豫審ヲ經テ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ現ニ公判ニ付セラレ充分ナル嫌疑アル者ナルヲ以テ他ノ事件ニ付テモ亦事實ヲ掩蔽スルノ恐アリ第六ニ記載シタル者ハ曾テ同事件ニ付キ公訴セラル、モ證憑ノ不充分ナルカ爲メ豫審ニ於テ免訴ノ言渡ヲ受ケタ

リ乃チ第二百六十一條ニ依リ更ニ公訴ヲ受クルノ恐アルヨリ故サラニ被告人ヲ陷害スルヲナシトセス總テ是等ノ者皆其陳述ニ信ヲ措クヲ得ス故ニ之ヲ聽クヲアルモ止タ事實參考ニ供スルニ過キス

現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付キ曾テ訴ヲ受クルト云フハ其犯罪ノ場所日時模様罪名刑名被害者等ノ異ナラサル事件ヲ指ス故ニ罪質相同シキモ他ニ異ナル所アレハ前ニ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者其證人ト爲ルヲ得可

シ又假令事件ノ毫モ異テラサル時ト雖モ前ニ公判ニ於テ其證憑充分ナラサルニ因リ無罪ノ言渡ヲ受ケタル者ハ後ニ如何ナル證憑ヲ發見スルモ更ニ之ヲ訴フルトテ許サ、ルヲ以テ本條第六ニ記載シタル者ト同一視ス可カラズ其陳述ヲ聽クニハ必ス宣誓ヲ為サシム可シ

第百八十三條 證人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見ヲ聽キ刑法第百八十條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ

但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サス醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人公證人若クハ神官僧侶其身分職業ニ關スル秘密ノ事件ニ付キ委託ヲ受ケタル者ハ前項ノ例ニ在ラス

前二條ニ記載シタル者ニ非スシテ宣誓ヲ為スコトヲ肯セス又ハ宣誓シタル上ニテ陳述ヲ肯セサル時ハ刑法第百八十條ニ定メタル公務ヲ行フヲ拒ム罪ヲ犯シタル者トス故ニ其條ニ從ヒ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ言渡

不可シ然レトモ醫師藥商穩婆代言人辯護人
 等其職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知
 得タル陰私ヲ秘隱スルハ法律ニ於テ之ヲ罪
 ト為サス却テ其秘密ノ事件ヲ他ニ漏告シタ
 ル時ハ之ヲ罪ト為ス〔刑法第三百六十條ヲ見
 ル可シ〕是ヲ以テ其者宣誓陳述ヲ肯セサルモ
 之ニ對シ罰金ヲ言渡ス可カラヌ又其者判事
 ノ呼出ヲ受ケテ證人ト為リ陰私ノ事實ヲ陳
 述スルモ漏告ノ罪アリト為ス可カラヌ刑法
 ニ其明文アリ〔同上〕

第百八十四條 證人ハ他ノ證人及ヒ被告人ト
 各別ニ之ヲ訊問ス可シ但事實發見ノ為メ必要
 ナリトスル時ハ證人ト他ノ證人又ハ被告人ト
 對質セシムルヲ得

證人ハ事實ヲ掩蔽スルヲナク已レカ知ル所
 ヲ陳述スルノ責アリ若シ他ノ證人又ハ被告
 人ト相對シテ陳述セシムル時ハ甲乙相和シ
 若クハ忌憚シテ其言ヲ盡サ、ルノ恐アリ故
 ニ各別ニ之ヲ訊問ス然レトモ被告人ノ人違
 ナキヲ證明シ又ハ各證人ノ陳述甚タシク

齟齬スル時ハ之ヲ分明ナラシムル為メ他ノ
 證人又ハ被告人ト對質セシムルヲ得此場
 合ニ於テハ第一百五十五條ノ規則ニ從フ
 第百八十五條 豫審判事ハ證人ノ陳述ヲ確實
 ナラシムル為メ必要ナリトスル時ハ重罪輕罪
 ノ犯所又ハ其他ノ場所ニ同行スルヲ得
 若シ證人同行スルヲ肯セサル時ハ第七十
 六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス可シ
 證人ノ陳述犯所ノ模様等ニ關シ其場所ニ臨
 ムニ非サレハ分明ナラサルヲアリ此場合ニ

於テハ其證人ヲ同行シテ臨檢ヲ為スヲ得
 若シ同行ヲ拒ム時ハ呼出ニ應シ出延セサル
 者ト同一ノ刑ニ處ス可シ
 第百八十六條 第一百五十六條第百五十七條ノ
 規則ハ證人ニ付テモ亦之ヲ適用ス
 證人外國人ナル時ハ判事及ヒ書記其語ヲ解
 スルモ必ス通事ヲ用ヒサル可カラス其所以
 ハ陳述書ハ訴訟書類ニ添ヘ公判ヲ為ス可キ
 裁判所ニ送致ス可キニ由ル其證人聾啞ナル
 時モ亦同シ

第一百八十七條 皇族又ハ勅任官證人ナル時ハ豫審判事書記ト共ニ其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ

皇族勅任官ト雖モ證人ト為ルノ義務ヲ免ル、トヲ得ス但其身位高貴ナルヲ以テ直チニ之ヲ裁判所ニ呼出サス判事其所在ニ就テ陳述ヲ聽ク可シ其陳述ヲ聽クニ付テハ總テ通常ノ規則ニ從フ可シ

第一百八十八條 書記ハ證人ノ陳述ニ付キ各別ニ調書ヲ作ル可シ

其調書ニハ證人宣誓ヲ為シタルト又ハ為サルノ事由ヲ記載ス可シ

書記ハ證人ノ訊問ニ立會ヒ其陳述スル所及ヒ判事ノ糾問スル所ヲ簡明ニ錄取ス可シ其調書ニハ證人宣誓シタルト及ヒ第一百八十一條第一百八十二條ニ定メタル身分ナルニ因リ宣誓セサルト其他訊問中ニ生シタル一切ノ事件ヲ記載ス可シ

第一百八十九條 豫審判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル為メ書記ヲシテ調書

ヲ讀聞カセシム可シ

證人ハ其陳述ヲ變更増減セシムヲ請求スルヲ得書記ハ其請求アリタルト及ヒ變更増減ノ條件ヲ調書ニ記載シ豫審判事及ヒ證人ト共ニ署名捺印ス可シ若シ證人署名捺印スルト能ハサル時ハ其旨ヲ附記ス可シ

書記ノ錄取スル所脱漏ナク又陳述外ニ涉ルトナカル可シト雖モ他日證人ヨリ異議ヲ申立ルト防ク爲メ書記ヲシテ其調書ヲ讀聞カセシメ相違ナキヤ否ヲ申立テシム可シ證

人相違アリト申立テ若クハ前ノ陳述ヲ變更増減セシムヲ請求スル時ハ更ニ訊問ヲ爲ス可シ此場合ニ於テモ前ノ訊問調書ヲ存シ後ノ調書ニ添置ク可シ

第九十條 證人ハ即時ニ出廷ニ付テノ旅費日當ヲ要ムルト得

若シ日稼ヲ以テ生業トスル者ナル時ハ旅費日當ノ外日稼高二等シキ償金ヲ要ムルト得本條ノ場合ニ於テハ豫審判事其金額ヲ定メ之ヲ言渡ス可シ

證人ト爲ルハ實ニ國民ノ義務ナリト雖モ其
呼出ニ應シ出廷スル爲メノ費用ヲ負擔ス可
キ責ナシ故ニ裁判ノ確定ニ至ルヲ待ツス旅
費日當ヲ要求スルノ權アリ其日稼ヲ以テ生
業トスル者例ヘハ車夫日傭夫ノ如キ一日ノ
得ル所ヲ以テ一日ノ生計ヲ營ム者ハ出廷ノ
爲メ賃銀ヲ得ルノ路ヲ失フニ因リ其日稼高
ニ等シキ償金ヲ要求スルヲ得可シ其旅費
日當ハ裁判費用規則ニ從ヒ判事里數ト日數
トニ應シ相當ノ金額ヲ算定シ日稼高ハ各人

相同シカラサルヲ以テ判事適宜ノ金額ヲ算
定シテ之ヲ言渡ス可シ總テ是等ノ金額ハ假
ニ裁判所ヨリ之ヲ給與シ裁判確定ノ後敗訴
シタル者ヲシテ之ヲ辨償セシム

○第七節 鑑定

第百九十一條 豫審判事ハ犯罪ノ性質方法及
ヒ結果ヲ分明ナラシムル爲メ鑑定人ヲ必要ナ
リトスル時ハ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得
可キ者一名又ハ數名ヲシテ鑑定ヲ爲サシム可
シ

夫レ犯罪ノ性質方法及ヒ結果ハ特別ノ學術
 識能アル者ニ非サレハ之ヲ分明ナラシムル
 一能ハサルノ場合アリ例ハ毒殺事件ニ付
 キ死屍ヲ解剖シ毒質ヲ分析シ毆打創傷ノ罪
 ニ付キ内外傷痕ノ輕重使用シタル器物ノ種
 類ヲ推知シ偽造貨幣ニ付キ混和シタル金質
 ヲ檢出スル等皆判事ノ概不能シ難キ所ナリ
 故ニ醫師化學家礦物學家等其學術又ハ職業
 ニ因リ鑑定スルヲ得可キ者ニ命シテ鑑定
 ヲ爲サシム可シ

第百九十二條 鑑定人ハ書記局ヨリ呼出狀ヲ
 以テ之ヲ呼出ス可シ其呼出狀ニハ犯罪事件ニ
 付キ鑑定ヲ命スルヲ及ヒ呼出ニ應セサル時ハ
 罰金ヲ言渡ス可キヲ記載ス可シ
 鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第百七十六條ノ規
 則ニ從ヒ處分ス可シ但勾引狀ヲ發スルヲ得
 ス
 第百七十七條ノ規則ハ本條ニモ亦之ヲ適用ス
 呼出狀ニハ第百七十三條ノ例ニ從ヒ鑑定人
 ト爲ル可キ者ノ氏名職業住所出廷ノ日時場

所其他本條ニ定メタル條件ヲ記載シ且其送達ト出廷トノ間少クトモ二十四時ノ猶豫アル可シ
鑑定人呼出ニ應セサル時ハ第七十六條ノ規則ニ從ヒ罰金ヲ言渡シ且再度ノ呼出狀ヲ發スルヲ得蓋シ鑑定人ハ證人ト相類スル者ナルモ亦自ラ差異アリ證人ハ犯罪事件ヲ目撃シ若クハ其前後ノ模様ヲ知ル者ニ限ルヲ以テ其陳述ヲ必要ナリトスル時ハ出廷ヲ拒ムニ拘ハラズ勾引狀ヲ以テ之ヲ法廷ニ引

致スルヲ許ス鑑定人ハ之ニ異ナリ苟クモ學術職業ニ因リ鑑定スルヲ得ル者ナレハ何人ヲ問ハス之ヲシテ鑑定セシムルヲ得可シ特ニ最初判事指命シテ呼出シタル者ニ限ラサルナリ故ニ鑑定人出廷セサルモ罰金ヲ言渡スニ止リ勾引狀ヲ發スルヲ許サズ罰金ノ言渡ヲ受ケタル鑑定人正當ノ事故ニ因リ出廷スルヲ能ハサリシ旨ヲ證明シタル時ハ其言渡ヲ取消ス可シ

第九十三條 鑑定人ハ正實ニ鑑定ス可キノ

宣誓ヲ為ス可シ其宣誓ハ第百八十條ノ式ニ從
 書記ハ鑑定人ノ宣誓シタルトテ鑑定命令書ノ
 紙尾ニ記載シ之ニ宣誓書ヲ添置ク可シ
 第百九十四條 鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓
 シテ鑑定ヲ肯セサル時ハ豫審判事檢事ノ意見
 ヲ聽キ刑法第百七十九條ニ從ヒ罰金ヲ言渡ス
 可シ但其言渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サ
 ス

鑑定人宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シタル上ニテ

鑑定ヲ肯セサル時ハ公務ヲ行フヲ拒ムノ罪
 アリ故ニ刑法第百七十九條ニ從ヒ四圓以上
 四十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ
 第百九十五條 第百八十一條第百八十二條ニ
 記載シタル者ニハ鑑定ヲ命スルトテ得ス但急
 遽ノ際正當ノ鑑定人ト為ル可キ者ナキ時ハ事
 實參考ノ為メ鑑定ヲ命スルトテ得

第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者
 ハ正實ニ陳述ヲ為サルノ嫌疑アルヲ以テ
 證人ト為スルヲ許サス既ニ陳述正實ナラサ

ルノ疑アリトスレハ亦正實ニ鑑定セサルノ
 疑ナキヲ得ス是ヲ以テ此二條ニ記載シタ
 ル者ハ學術職業ニ因リ鑑定スルノ識能アル
 モ鑑定人ニ命スルヲ得ス然レトモ事急遽
 ニ出テ正當ノ鑑定人ト爲ル可キ者ヲ得ルニ
 違アラサル時ハ假ニ鑑定セシムルモ止タ事
 實ノ參考ニ供スルニ過キス
 第百九十六條 豫審判事ハ成ル可ク鑑定ニ立
 會フ可シ

判事鑑定ニ立會ヒ其手續ヲ視察スル時ハ容

易ニ心證ヲ資ルノ益アリ故ニ鑑定數日ニ涉
 ルカ若クハ他ノ豫審處分ヲ行フニ因リ差支
 アルノ場合ヲ除クノ外成ル可ク鑑定ニ立會
 フ可シ

第百九十七條 豫審判事ハ鑑定人ノ請求ニ因
 リ又ハ職權ヲ以テ鑑定人ヲ増加シ又ハ別人ヲ
 シテ鑑定セシムルヲ得

鑑定人ハ其員數ノ不足ナルカ爲メ時日ヲ費
 シ終ニ鑑定ノ結果ヲ得サルニ至ラントテ恐
 レ若クハ其身ニ差支ヲ生シ因テ鑑定ニ從事

スルヲ能ハサル時ハ人員ヲ増加シ若クハ其職ヲ辭シ更ニ別人ニ命セラレシトテ請求スルノ權アリ判事ハ鑑定人ノ請求ナシト雖モ職權ヲ以テ是等ノ處分ヲ為スルヲ得第百九十八條 鑑定人ハ鑑定書ヲ作り其手續結果及ヒ鑑定ヲ為シタル時間ヲ詳記ス可シ若シ結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ

鑑定人意見ヲ異ニスル時ハ各自鑑定書ヲ作り又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載ス可シ

鑑定ノ結果トハ死者ノ胃腑中果シテ毒物ヲ含有セシヤ否殴打創傷果シテ致命ノ原因ナリヤ否等總テ被告人ノ利害ヲ問ハス鑑定ニ因リテ知得タル所ノ結果ヲ云フ若シ死屍ノ腐爛等ニ因リ術ヲ施シテ其結果ヲ得サル時ハ推測スル所ヲ申立ルルヲ要ス
 鑑定書ハ證人ノ訊問調書ト異ニシテ鑑定人自ラ之ヲ作り如何ナル手續ヲ以テ鑑定ヲ為シタル事其知得タル結果及ヒ幾許時間ヲ費シタル事ヲ詳記ス可シ其手續及ヒ時間ハ他

日其鑑定ノ當否ニ付キ異議ヲ生スル時參考ト為ルヲアルヲ以テナリ
鑑定人數名ヲ命シタル場合ニ於テハ各自意見ヲ異ニシ一致セサルヲナシトセス此場合ニ於テハ各別ニ鑑定書ヲ作ル可シ然レトモ甲乙意見ヲ異ニスル所僅カニ二三ニ過キサ
ル時ハ一箇ノ鑑定書ヲ作り其意見ノ異ナル所ニ付キ甲ノ説ハ云々乙ノ説ハ云々ト記載スルモ妨ケナシ

第百九十九條 鑑定人ハ鑑定書ニ年月日ヲ記

載シ署名捺印及ヒ契印ス可シ

又鑑定書ニハ豫審判事之ヲ受取リタル年月日

ヲ記載シ書記ト共ニ捺印ス可シ

鑑定書ハ鑑定命令書ニ添置ク可シ

外國人鑑定ヲ為シタル時ハ其鑑定書ニ裁判所

ヨリ命シタル通事ノ作リタル譯本ヲ添置ク可

シ

第二百條 鑑定人及ヒ通事ニハ旅費給料其他

相當ノ費用ヲ給與ス可シ

第百九十條ニ於テ證人ハ旅費日當ヲ要ムル

トヲ得ト記載セリ乃チ其要求ナケレハ之ヲ
給與セサルナリ鑑定人ハ之ニ異ナリ本條ニ
給與ス可シト記載ス其要求アルヲ待タサル
ナリ蓋シ鑑定人ハ醫師技術家等職業ニ因リ
特別ノ識能ヲ有スル者ニ非サレハ之ヲ命セ
ス證人ノ貴賤貧富ヲ問ハサルノ類ニ非ス鑑
定ヲ以テ其職ト爲スト謂フモ不可ナルトナ
シ故ニ其要求ナシト雖モ旅費給料及ヒ鑑定
ヲ爲スニ付キ費用シタル所ノ金額ヲ給與ス
可キナリ其旅費給料ハ裁判費用規則ニ從ヒ

判事之ヲ算定シ鑑定ノ費用ハ實費ヲ給ス可
シ

○第八節 現行犯ノ豫審

夫レ罪ノ輕重ヲ問ハス其現行犯ニ係ルノ故
ヲ以テ刑罰ヲ變更スルトナシ然レトモ其治
罪手續ニ至リテハ急速ヲ主トシ以テ犯人ノ
逃走證憑ノ湮滅ヲ防カサル可カラズ是レ特
ニ本節ヲ設ケ變則ヲ定メタル所以ナリ

第二百一條 豫審判事ハ檢事ヨリ先ニ現行ノ
重罪輕罪アルトヲ知リタル場合ニ於テ其事件

急速ヲ要スル時ハ檢事ノ請求ヲ待タス直チニ
其旨ヲ通知シ豫審ニ取掛ルヲ得
豫審判事ハ犯所ニ臨檢シ令狀ヲ發シ其他此章
ニ定メタル規則ニ從ヒ豫審ノ處分ヲ爲スヲ
得

通常非現行犯ノ場合ニ於テ豫審判事ハ檢事
ノ公訴若クハ民事原告人ノ私訴アルニ非サ
レハ豫審ニ取掛ルヲ得サルヲ原則トス然
レトモ現行犯ニ在テハ其事件固ト急速ヲ要
スルヲ以テ此原則ヲ墨守スルヲ必要トセ

ス檢事民事原告人ノ請求ヲ待タス自ラ豫審
ニ著手スルヲ得但法律ニ於テハ成ル可ク
速ニ通常ノ法式手續ニ復スルヲ欲スルヲ以
テ其豫審ニ著手スル前先ツ其旨ヲ檢事ニ通
知シ檢事ヨリ成規ニ從ヒ請求ヲ爲スニ便ナ
ラシム可シ

判事ハ自ラ豫審ニ著手スルノ權アルヲ以テ
苟クモ此章ノ規則ニ違フヲナケレハ犯所ニ
臨檢シ令狀ヲ發シ被告人證人ヲ訊問シ鑑定
人ヲ命シ家宅ヲ搜索シ物件ヲ差押フル等總

テ必要ナリト思料スル處分ヲ爲スヲ得可
シ
第二百二條 前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴
ナシト雖モ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ公
訴ヲ受理シタル者トス其調書ニハ現行ノ重罪
又ハ輕罪ナルヲ記載ス可シ
豫審判事ハ速ニ書類ヲ檢事ニ送致ス可シ但檢
事ヨリ其豫審手續ヲ繼續ス可キ者ニ非サルノ
意見アリト雖モ通常ノ規則ニ從ヒ之ヲ終結ス
可シ

前條ノ場合ニ於テハ檢事ノ起訴アラサルカ
故ニ公訴未タ起ラサルニ似タリト雖モ法律
ニ於テハ豫審判事檢證調書ヲ作ルヲ以テ乃
チ公訴ヲ受理シタル者ト看做ス是レ猶ホ第
百十條ノ場合ニ於テ判事直チニ被害者ヨリ
民事原告人ト爲ル可キハ申立ヲ受ケタル時
ハ檢事ノ起訴ナシト雖モ併セテ公訴ヲ受理
シタル者ト看做スト同一ナリ
判事必要ナル處分ヲ終リタル時ハ其書類ヲ
速ニ檢事ニ送致シテ其意見ヲ求ム可シ假令

檢事ニ於テハ其所為法律ノ罰スル所ニ非ス
 又ハ大赦期滿免除等ニ因リ公訴既ニ消滅シ
 タリトシテ引續キ豫審手續ヲ行フ可キ者ニ
 非サルノ意見ヲ申立ルト雖モ判事一旦檢證
 調書ヲ作り既ニ公訴ヲ受理シタルヲ以テ檢
 事ノ意見ニ拘ハラヌ第二百二十三條以下ノ
 規則ニ從ヒ豫審終結ノ言渡ヲ為ス可シ蓋シ
 裁判官タル者公訴ヲ受理シタル以上ハ檢察
 官之ヲ拋棄スルモ必ス判決ヲ為サ、ル可カ
 ラス〔第二百二十二條及ヒ第三百一條ヲ參看

ス可シ

第二百三條 檢事ハ豫審判事ヨリ先ニ現行ノ
 重罪輕罪アルヲ知リタル時ハ豫審判事ヲ待
 ツヲナク其旨ヲ通知シテ犯所ニ臨檢シ豫審判
 事ニ屬スル處分ヲ為スヲ得但罰金ノ言渡ヲ
 為スヲ得ス
 證人及ヒ鑑定人ノ陳述ハ宣誓ヲ用フルヲナク
 之ヲ聽ク可シ

檢事ハ非現行犯ノ場合ニ於テハ其證憑及ヒ
 犯人ヲ搜查シテ起訴ノ手續ヲ為スニ過キサ

ルモ現行犯ノ場合ニ於テハ其權力殆ト豫審
 判事ニ異ナラス然レトモ檢事ハ固ト判事ト
 其職ヲ同フセス刑事ノ原告ト爲リテ罪ヲ訴
 フル者ニシテ自ラ事ノ是非曲直ヲ判スルノ
 權ナシ故ニ變則トシテ判事ニ屬スル處分ヲ
 爲スコトヲ得ルモ證人鑑定人其呼出ニ應セサ
 ル場合ニ於テ罰金ノ言渡ヲ爲スコトヲ得サル
 ナリ
 又檢事ハ證人ヲ訊問シ及ヒ鑑定人ヲ命スル
 コトヲ得ルト雖モ是等ノ者ヲシテ宣誓セシム

ルコトヲ得ス止夕事實參考ノ爲メニ其陳述ヲ
 聽ク可キノミ

第二百四條 前條ノ場合ニ於テ檢事ハ證憑書
 類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ豫審判事ニ送致ス
 可シ

前條ノ場合ニ於テハ檢事豫審判事ニ代リ假
 ニ其職務ヲ行ヒタル者ナレハ豫審手續ヲ繼
 續ス可シト思料スルモ又繼續ス可キ者ニ非
 スト思料スルモ共ニ自ラ之ヲ決スルコトヲ得
 ス其意見書ヲ證憑書類ニ添ヘテ豫審判事ニ

送致シ其處分ニ供ス可シ

第二百五條 第二百三條ニ於テ檢事ニ許シタ

ル職務ハ司法警察官モ亦假ニ之ヲ行フヲ得

但令狀ヲ發スルヲ得ス

司法警察官ハ證憑書類ニ意見書ヲ添ヘ被告人

ト共ニ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可シ

第六十條第一項ニ記載シタル司法警察官ハ

犯罪ヲ搜查スルニ付キ檢事ト同一ノ權ヲ有

スレトモ現行犯ノ豫審ニ付テハ少ク其權ヲ

減殺シ令狀ヲ發スルヲ許サス况ンヤ檢事

明治十四年九月第四十六號布告
治罪法第二百五條
第一項但書ニ司法警察官ハ令狀ヲ發スルヲ得サル旨記載有之候ヘトモ當分ノ内現行犯ノ場合ニ限リ令狀ヲ發シ苦シカラズ

ノ指揮ヲ受ク可キ他ノ司法警察官ニ於テオヤ

司法警察官檢證處分ヲ終リタル時ハ證憑書

類ニ意見書ヲ添ヘ速ニ之ヲ檢事ニ送致ス可

シ若シ第二百二條ニ從ヒ自ラ被告人ヲ逮捕シ

又ハ第二百三條ニ從ヒ巡查ヨリ之ヲ受取リタ

ル時ハ併セテ其被告人ヲ送致ス可シ

第二百六條 檢事被告人ヲ受取リタル時ハ二

十四時内ニ之ヲ訊問シ調書ヲ作り勾留狀ヲ發

スルト否トヲ問ハス一切ノ書類ニ請求書ヲ添

豫審判事ニ送致ス可シ
 若シ起訴ヲ爲ス可カラサル者ト認メタル時ハ
 直チニ被告人ヲ放免ス可シ
 司法警察官ヨリ被告人ヲ送致シタル時ハ檢
 事其送致ヲ受ケタルヨリ二十四時内ニ之ヲ
 訊問シテ調書ヲ作ル可シ若シ其事件重罪又
 ハ輕罪ニシテ豫審ヲ要スル者ト思料シタル
 時ハ一切ノ證憑書類ヲ豫審判事ニ送致シテ
 豫審ヲ請求ス可シ此場合ニ於テ檢事ハ訊問
 シタル後被告人逃亡スルノ恐アリトスル時

ハ勾留狀ヲ發スルヲ得

檢事其事件ヲ違警罪ナリトスル時ハ證憑書
 類ニ意見書ヲ添ヘ之ヲ違警罪裁判所檢察官
 ノ職務ヲ行フ可キ警部ニ送致ス可シ若シ罪
 ノ問フ可キ者ナク隨テ起訴ヲ爲ス可カラズ
 ト思料シタル時ハ即時ニ被告人ヲ放免ス可
 シ是レ檢事自ラ豫審ヲ爲シタル場合ト異ナ
 ル所ナリ〔第二百四條ヲ參看ス可シ〕

第二百七條 豫審判事ハ二十四時内ニ被告人
 ヲ訊問ス可シ此場合ニ於テハ檢事ノ發シタル

勾留狀ヲ解キ又ハ之ヲ存スルヲ得

豫審判事檢事ノ請求ヲ受ケタル時ハ公訴既ニ起リタル者ナリ故ニ二十四時内ニ被告人ヲ訊問シ然ル後通常ノ規則ニ從ヒ豫審ノ手續ヲ爲ス可シ若シ檢事先ニ勾留狀ヲ發シタル時ハ判事之ヲ其儘ニ存スルモ或ハ之ヲ解テ被告人ヲ釋放スルモ其自由ナリトス

第二百八條 豫審判事ハ檢事又ハ司法警察官ノ爲シタル手續ニ付キ更ニ其取調ヲ爲スヲ得但檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ之

ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

現行犯ノ場合ニ於テ檢事又ハ司法警察官假ニ豫審處分ヲ爲スモ其手續或ハ充分ナラス或ハ式ニ違フ者アラシ故ニ判事ハ更ニ其全部又ハ幾分ニ付キ取調ヲ爲スヲ得可シ且證人鑑定人ノ陳述ノ如キハ先ニ宣誓ヲ用ヒナリシヲ以テ判事必ス定式ニ從ヒ更ニ之ヲ聽ク可シ然レトモ檢事又ハ司法警察官ノ作リタル調書ハ他日ノ參考ト爲ル可キニ因リ之ヲ訴訟書類ニ添置ク可シ

第二百九條 檢事は輕罪ノ現行犯ニ係ル場合ニ於テ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ被告人ヲ訊問シタル後豫審ヲ求ムルニ及ハスト思料シタル時ハ直チニ輕罪裁判所ニ呼出スヲ得

檢事ハ自ラ豫審ヲ爲シタル場合ナルト司法警察官ヨリ被告人ヲ受取リタル場合ナルトヲ問ハス又先ニ勾留狀ヲ發シタルト否トニ拘ハラズ其事件輕罪ニシテ重大且繁難ハラスト思料シタル時ハ非現行ノ輕罪ノ場合ニ

於ケルカ如ク豫審ヲ請求セスシテ直チニ被告人ヲ輕罪裁判所ノ公判ニ付スルヲ得可シ其手續ハ第三百四十八條以下ニ詳カナリ

治罪法註釋卷四終

治罪法註釋卷四終

1
8

東 京 圖 書 館

八	八	二	一		
冊	號	架	函	屬	類